**強い台風が私たちの島を通過して行きました。目立った被害もなくけが人が出ることもなく守られたことを感謝いたします。そして今週もあなたはこの静けさのうちに私たちの健康を守ってくださり礼拝へと導き入れてくださいました。私たちは何かがあればあなたにすがり祈りますが、少し穏やかな蛇が続けばあなたに感謝する心が薄れ自分の力のみで生きているかのように思い上がりの心が芽生えてしまうものです。どうかこの礼拝をとうして創造主であるあなたへの思いを深め自分の小ささ弱さに向き合いつつ、あなたなしでは生きることのできない信仰者としての姿勢を固くしてください。**

**また暑さの中を生きています。ひとりひとりの健康をお守りください。体を心をあなたが支えてくださいますように。私たちが元気で、この伝道所を求める人たちを迎え入れることができますように。**

**この小さな伝道所にあっても私たちがこの世界の平和を祈り、小さな祈りであってもその祈りを重ね、神への愛を隣人への愛をこの地上に求めて行くことが出来ますように。どうか私たちの祈りには力があることをあなたがお示しください。**

**私達と離れた場所で暮らしていらっしゃる赤羽姉妹を、山本倫太郎兄弟をお守りください。**

**礼拝になかなか来ることのできない信仰の友を支えてください。**

**メシアに対して**

**イザヤ書11：3にこう記されている。**

**「エッサイの株から芽が萌え出で、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊が留まる。知恵と識別の霊。主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。」**

**預言者イザヤが残したメシア預言だ。**

**その方は、「目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない」と言われている。**

**主イエスはエルサレム神殿で、人々に向かっておっしゃった。**

**「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい」**

**メシア到来の預言を受け継ぎ、聞いてきた人たちが、実際に目の前に現れたメシアにどのように向き合ったのか、今日も見ていきたい。**

**ご自分の権威**

**エルサレムでナザレのイエスを待ち受けていたユダヤの指導者たちは、神殿でイエスが人々に教えを説くのを聞いて驚いた。**

**「この人は学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」**

**誰かの弟子になって、何年も聖書を学んだわけでもないのに、人々に聖書の深いところまでお教えにいなっていたことに驚いたのだ。**

**主イエスは「自分勝手に話す者は、自分の栄光を求めるのである」とおっしゃって、ご自分の教えが、聖書の自分勝手な解釈ではなく、ご自分をおつかわしになった方のものであることを示された。**

**そしてその場にいた人たちに逆に質問された。**

**「モーセがあなた方に律法を与えたのに、なぜあなた方は、私を殺そうと狙うのか」**

**あなた方こそ、律法を破ろうとしているではないか、というおっしゃるのだ。**

**主イエスは以前、エルサレムのベトザタの池のほとりで、38年間病気で立てなかった人を癒された。**

**その癒しを行ったのが安息日だったため、ユダヤの指導者たちは、「安息日のおこなってはならないことをした」と主イエスのことを非難し、殺意を抱くようになった。**

**そのことを指摘して、「なぜ私を殺そうと狙うのか。それこそモーセの律法に反することではないか」、とおっしゃるのだ。**

**それを聞いた群衆はその言葉の意味が分からなかった。**

**「誰もあなたのことを殺そうとしていないではないか」と言った。**

**実際、エルサレムの群衆はそうだっただろう。**

**しかし、ユダヤ人指導者たちの心のうちにはまだ主イエスへの殺意が残っていたのだ。**

**主イエスは何が人の心のうちにあるのかをご存じだった。**

**律法の解釈**

**主イエスはユダヤ人たちの律法の理解の矛盾を明らかにされた。**

**ユダヤの人たちは生まれたばかりの赤ん坊に割礼を施していた。**

**律法でそういわれているからだ。**

**律法学者たちは子供が生まれて8日目にはそれが安息日であっても割礼を施して良いと考えていた。**

**そうやって割礼の掟を優先させて、律法を守っていたのだ。**

**主イエスはそのことを引き合いなさっている。**

**割礼は体の一部分に関わることだ。**

**しかし、主イエスが安息日に行われた癒しは体全体の癒しであった。**

**安息日に割礼を施すこと許されるなら、体全身を癒す業は、なおさら正しいことではないか、ということだ。**

**そもそも、主イエスを殺そうと考える人たちは、「あなたは殺してはならない」という十戒の第五戒を破ろうとしているのだ。**

**安息日に誰かを癒すことは、律法に反することなのだろうか。**

**「安息日は仕事の手を休めて神を礼拝しなさい」とモーセの律法は確かに言っている。**

**しかし、それは、安息日に人を癒してはいけない、ということなのだろうか。**

**人を癒すということが、誰かを礼拝から引き離すこと、神に背を向けることなのだろうか。**

**主イエスは、律法の細部に目を奪われてしまっている人たちに、神の御心の根本を問いかけていらっしゃる。**

**主イエスの教えは、これまでになかった真新しい教えに聞こえた。**

**しかし、そんなことはない。**

**主イエスの教えは、誰よりも保守的なものだ。**

**マタイ福音書５章での山上の説教の中で、主イエスはおっしゃっている。**

**「私が律法や預言者たちを廃棄するために来た、と思ってはならない。廃棄するためではなく、満たすために来たのだ」**

**主イエスは律法の新しい解釈をもたらされたのではない。**

**神がお求めになること、神の御心を実現させるために来られたことを明言していらっしゃる。**

**人々が失いかけていた、律法のもともとの意味を、神の思いを取り戻すために世に来られたのだ。**

**そして最後に主イエスはおっしゃった。**

**「うわべだけで裁くのはやめて、正しい裁きを下しなさい」**

**メシア論へと発展**

**主イエスは神殿の境内で、こんなにも大胆に人々にお話しなさった。**

**ユダヤ人の指導者たちが聞いたら黙っていないようなことだった。**

**しかし、指導者たちは主イエスのことを捕えようとしていなかった。**

**このことを群衆は不思議に思ったようだ。**

**「これは、人々が殺そうと狙っている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなかろうか。」**

**ここまで大胆なことを神殿で話したら、普通は捕えられてしまうのに、指導者たちがこの人に何もしないということは、この人がキリストだと認めたということなのだろうか。**

**そこで人々は新しい議論を始めた。**

**ナザレのイエスについて、「いったい何者なのか」いうことまた新たに考え始めたのだ。**

**「この人こそ、本当のキリストではないか」、と思い始めた。**

**しかし、同時に戸惑いもあった。**

**群衆はこんな風に言っている。**

**「しかし、私たちは、この人がどこの出身が知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、誰も知らないはずだ」**

**ユダヤ人の間に伝わっていた伝承では、メシアは預言者エリヤによって示される時まで隠れているだろう、言われていた。**

**メシアがどこから来るのかは誰にも分からないとされていた。**

**そしてそのメシア自身も、自分がメシアであるということに最後の瞬間まで気づくとはないと考えられていた。**

**マラキ書３：１「あなたたちが待望している主は、突如、その聖所に来られる」**

**神が神殿に突然来られるというマラキの預言を、人々は「メシアは誰にも知られていない人だろう」と考えられるようになったのだろう。**

**人々は主イエスのことをよく知っていた。**

**「ヨセフの子イエス」とか、「ナザレのイエス」として知られていた。**

**ナザレのイエスは、メシアであるように思えるが、しかし、皆によく知られているから、やはりメシアではないのだろうか、という戸惑いがあったようだ。**

**私たちも**

**「イエスとはいったい何者なのか」**

**このことで迷い、人々の間で戸惑うのは、今の私たちも同じではないか。**

**よっぽど特別な神秘体験をしないと人はキリストを信じることはできないのではないか、と多くの人は考えている。**

**普通の人には見えないものが見えるような人だけが信仰を持つことができるのではないか。**

**特別な人が、または立派な人が、信仰というものを持つことができるのではないか、と思われたりしている。**

**しかし、キリスト者として、私たちはどう考えるだろうか。**

**私たち自身、信仰というものをどんなふうに捉えているだろうか。**

**自分がほかの人と違う何か特別なものをもっているから、キリスト者になれたのだろうか。**

**そうではないだろう。**

**信仰は特別な人だけに与えられる特別なものではないことを、自分を通して知っている。**

**神によって造られた私たちが、神と共に生きること、神を忘れそうになり神から離れてしまいそうになる私たちを連れ戻してくださるキリストに従うことは、実は私たちにとって呼吸したり食事をしたりするぐらい日常のことであり、自然なことであるはずなのだ。**

**神は私たちの手が届かない、思いも届かないほど遠くて、高いところにいらっしゃる方だ、と思い込んでいないだろうか。**

**そうではない。神が自分と同じ地平に立ち、私たちの日常を共に歩んでくださる方なのだ。**

**イエス・キリストが来られたのは、私たちの生活の真っただ中だ。**

**聖書が伝えているのは、そのことだ。**

**神は私たちにわかる言葉で、今も語り掛けてくださっている。**

**キリストが群衆にお話しなさったように。**

**主イエスの時は近い**

**7章の28－29節で主イエスはご自分がどこから来たのか、ということを非常にはっきりと そしてシンプルに語られた。**

**「私は自分勝手に来たのではない。私をおつかわしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。私はその方を知っている なぜなら私はその方のもとから来たのであり その方が私を遣わされたからだ」**

**これを聞いた人々は また 主イエスのことを捕えようとした。**

**しかし 主イエスの時はまだ来ていなかったのでそのことは起こらなかった、と書かれている。**

**神の救いの御計画が、神の御手の内に進められている。**

**今、私たちが聖書を通してみているのは、地上に来られた神・メシアを前にして、世の人々が分裂する姿だ。**

**これはいつでも起こっていることだ。**

**キリストを前にして、信じる人と、信じない人に分かれる。**

**主イエスをキリストとして受け入れて従う人と、キリストに対して、またキリスト者に対して敵意を抱く人に分かれるのだ。**

**主イエスを信じる私たちにしても、主イエスを疑う時がある。**

**神の御心がわからなくなる時がある。**

**しかし、私たちは考えたい。**

**キリストを否定しようとして、完全に否定することはできるだろうか。**

**キリストを否定するには、聖書の言葉を否定するには、私たちは信仰生活の中で、あまりにも多くのしるしを見せられてきたのではないか。**

**わかりやすい、何か神秘的で非科学的な現象を見せられたとかいうことではなく、必要な時に、何かが自分に与えられてきた、絶望しかないと思う中で道が与えられた、という体験を、信仰生活の中で思い出すことができるのではないか。**

**人との出会いが、言葉が、思ってもみなかった道が、不思議な仕方で与えられてきたことを思い返すと、私たちはキリストのしるしの中に生かされていることを思わされる。**

**聖書を通してわかるのは、キリストは私たちの目の前にいらっしゃる、ということだ。**

**人々の前に立ち、私たちにわかる言葉で神の言葉を教えてくださっている。**

**今、キリストは私たちの肉の目には見えないかもしれない。**

**しかし、聖書の言葉を通して、聖霊の働きを通して、限りなく私たちの近くにいてくださっている。**

**私たちの心の内までご覧になって「私が命のパンである」と呼び掛けてくださっている。**

**「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、いつも私の内におり、私もまたいつもその人の内にいる」とおっしゃっている。**

**私たちはこのことを一生かけて知っていくのだ。**